ヨーロッパひとり旅。
あなたは、このピンチを
どう切り抜ける？
Part 2

ヒグチ　サトシ

脱ツアー旅行！
個人旅行はスリス満点！

第二弾：帰国前日の予期せぬ出来事　～
レンタカーでミラノに戻る途中の出来事

ヨーロッパ旅行中に突然遭遇したピンチと、
それを、どのように切り抜けたのかの実話

ヒグピー書房　定価　無料

帰国前日の予期せぬ出来事　～　レンタカーでミラノに戻る途中の出来事

年末年始の休暇を利用して、かみさんと２人で、フィレンツェおよびニースをレンタカーで廻る事にした。
レンタカーはミラノ・マルペンサ空港でチェック・アウトしたが、その日はクリスマスイブであった。あいにく成田での出発が５時間程ディレイした為、私たちが空港内にあるレンタカーのデスクに着いたのは、営業時間をとっくに過ぎた夜の１１時頃であった。
しかしデスクでは、一人の女性社員がディレイした私たちを待っていてくれた。
「クリスマスイブなのに申し訳ない」と謝ると、「仕事ですから」と笑って答えてくれたのを今でも覚えている。私が悪い訳ではないが、それにしても、その女性には申し訳ない事をした。
レンタカーを借りると、不慣れな道をミラノ市内のヒルトン・ホテルへと車を走らせた。
まだカーナビなど無い時代。知らない土地、右側通行、かつ長いフライト後の運転、という３重苦の状態で地図を見つつの運転だ。ミラノ空港から市内まではハイウエイを利用したのだが、誤って本来より手前のインターチェンジで降りてしまった。東名高速道路で東京へ行くのに東名横浜インターで降りてしまった、という感じだ。
再び、高速に乗り直せば良かったのだが、下道でもなんとか行き着くだろうと楽観的に考えたのが間違えであった。

初めて走る道なので、意図した道を走っているかどうかも分からない。そもそも、今どこにいるのかも正確に分からなくなり、「しまった」と気づいた時には、もう遅かった。
道の脇には道路標識が出ていて、こちらがどこどこだ、と示してはいるが、その地名がどこなのかもわからない。時折現れる、「ミラノ・セントラル」という標識の方向に向かって車を走らせるしか無い状況になって来た。しかし、「ミラノ・セントラル」と標識が出ているうちはまだ良い。ミラノ市内に入ると、もうこの標識は出てこない。市内に入ったのか、入ったなら、ここはどこなのか？　それとも市内からは遠く離れた、全く違う場所に来てしまったのか、判断がつかなくなってしまう。
クリスマスイブとはいえ、もう深夜。人に聞きたくても誰も歩いていない。
このままでは、ホテルに着く頃には朝になることも覚悟しなくてはならないと思った。

とにかく、もう一度、現在位置を推定し、そこからホテルまでの道筋でマイルストーンになりそうな公園や大きな通りの名前を頭に叩き込み、車をスタートさせた。
そうすると、なんということだろう！頭に入れたマイルストーンが次第に現れ始めた。
ほとんど奇跡的に、しかも結果的には、それほどの時間のロスも無く、私たちはホテルにたどり着く事ができた。
私は方向感覚にかなりの自信を持っているのだが、この日、無事にホテルに到着した事は今でも信じられない。

その後は、当初の予定の通り、フィレンツェ（二泊）、サンタ・マグレリータ・リグレ（一泊）、ニース（二泊）を順調に巡った。
帰国のフライトは、行きと同じミラノ・マルペンサ空港からなので、帰国前日は高速道路をニースからミラノ市内のホテルへと車を走らせていた。
ところがまずいことにジェノバを通り過ぎたあたりから雪がぱらつき始めたのだ。
高速道はだんだん山間に入り、あっという間に路面が白くなっていった。

「これはやばい！」

私はあせった。ここさえ乗り切れば後は大丈夫なのか、それとも、この先もっと雪が積もるのか？
まさか雪が降るとは思って無かったので、天気予報など聞いてもいなかったし、この辺の地形も全く知らないので、今後の予想がつかなかった。
しかし冷静に考えると、すでに路面はチェーンが必要な状況になってきているし、この先はもっと雪が積もっている可能性も十分考えられる。

「チェーンが必要だ！」

そう判断した私はサービスエリアに入った。
すでに、サービスエリアのガレージでは、チェーンを買い求める人が１５人ほど、店員を真ん中に取り囲んでいた。私も必死でその輪の中に入り込む。何と言っても、明日帰国できるかどうかがかかっているのだ。なんとか今日中にミラノまでたどり着かねばならない。
しかし、他のイタリア人も必死だ。彼らもチェーンが無くては先に進む事が出来ない。
やっとの思いで輪の中に入って驚いた。店員の足元にはいくつもの金属製のチェーンが裸のまま山積みされ、まるでスパゲティーの様にこんがらがっているではないか！
店員はそのスパゲティーを一つひとつほぐしながら、「このチェーンのサイズは、xxxx だ、このチェーンは、xxxxx だ」と仕分けている様である。
この状況は、イタリア語が話せない私にとっては非常に分が悪い。私は不安に襲われた。

「物を買うときは一列に並べ！」

そう叫びたい気持ちであったが、しかし商品がスパゲティー状態で、どんなサイズのチェーンがいくつあるかも分からないこの状況下で一列になれというのは無理な話だ。みな「商品」がどうなっているのか気がきではないのだ。
沢山のイタリア人客が我れ先とチェーンを欲しがっている状況下で、言葉を話せない私が自分のタイヤに合ったチェーンをゲットできるとは、とても思えなかった。

「どうしよう！？」

そんな時である。私は、反対車線にもサービスエリアがあることに気がついた。

「向こうのガレージはどうなっているのだろう？」

雪が降る中を目を凝らして様子をうかがうと、反対車線のガレージに客はいないようだった。反対車線でここまで来られる車は既にチェーンかスタッドレスを装着しているのであろう。さらに幸運な事には、両方のサービスエリアは本線の下を地下道でつながっているようである。

「ここではゲットするのは無理だ。向こう側のガレージに行ってみる」

車に戻ってかみさんにそう言うと、私は反対車線のサービスエリアへと走った。

数分後、この機転により、私はなんとかチェーンをゲットすることができ、予定通りミラノ市内のホテルにたどり着く事ができたのであった。
翌々日、無事帰国できた私たちは、ミラノの交通が予期せぬ雪で混乱しているというニュースを自宅のテレビで見たのだった。私たちは、ついさっきまで当事者だったのに、今では日本でテレビを通して第三者になっているのが、なんだか不思議な感じであった。

翌朝、ミラノ市街から空港へ向かう途中の雪景色